水牛通信　毎月１回10日発行　1982年８月10日発行　通巻38号　1980年５月23日第三種郵便物認可

水牛通信

VOL.4 NO.8
毎月1回・10日発行
定価200円

稲は音もなく育つ

水牛社会科コンサートについて　2

金哲秀さんと〝題知らずの歌〟　田川律　4

関東大震災の日々　6

水牛はたがやす

荒川土手から訴える　11

故郷を奪われた人々の歌　12

水牛楽団だより　17

強制連行された少年の話　韓到得さんの話　18

人はたがやす

日帝に対する抵抗の歌　任東権　仁科健一訳　24

水牛社会科コンサートについて

昨年から今年にかけて、ワルシャワ（ポーランド）サンチャゴ（チリ）カタルーニャ（スペイン）沖縄と太平洋の島々、バンコク（タイ）光州（韓国）と世界各地でうたわれたたたかいの歌、民衆の歌を集めてうたってきた水牛楽団のこれからの一年は〝水牛社会科コンサート〟と名付けて、日本の近代史の中で、重要な節目になった日をテーマに、その時うたった歌や、詩、あるいはその現場にいた〝生き証人〟の証言などを集めたコンサート。

選んだ日とテーマは九月一日＝関東大震災と朝鮮人大虐殺、十二月八日（コンサートは会場の都合で十二月十日）＝八紘一宇と天皇制、三月十五日＝多喜二虐殺と蟹工船、六月十五日＝樺美智子と安保条約、八月十五日＝敗戦とアジアの夜明け。それぞれのテーマにもとずいた特集を毎回、約四十分にまとめる。ほかに、この一年間で二百曲を超すレパートリーを持つようになった水牛楽団の曲の中から、その都度プログラムを組んで演奏する。

この五回の予定を見ればわかるように、ひとつひとつが、かなり音楽とは縁遠いかのようにも思われる。しかし、そう考えるのは音楽を、社会の出来事と切り離してとらえているからではないか。その時々に、圧迫された側がうたった歌は、ともすれば表面に出てこない。今一度歴史を眺め直す作業と共に、そこでうたわれた歌、を探ってみたい、というのが狙いでもある。

げんに、第一回の「関東大震災と朝鮮人大虐殺」のテーマも、改めて調べてみると、別項でさまざまに述べるように、埋もれている歌を幾つか発見することができた。そういう歌を見つける過程で、日本人がいかに朝鮮人にひどい事をしてきたか、ということもはっきり知ることができた。

その意味では、今回の五回は、一回一回切り離し難くつながるわたしたち自身の過去への見直しでもある。それが具体的にコンサートの形でどんな風に具体化できるか、は大変な作業であるが、聞く人にも問題を提起できるようなものになれば、と思う。

水牛社会科コンサート①

9月1日 関東大震災と朝鮮人大虐殺

9月1日(水)午後7時開演、中野文化センター

第1部

名曲メドレー：水牛楽団の楽器を使ってさまざまの名曲のメドレー

水牛名歌選：200曲のレパートリーの中からポーランドの歌を中心に。「しだれ柳」「ヤネク・ヴィシネフスキーは死んだ」ほか

家庭用名曲集：水牛楽団のメンバー5人がそれぞれ片手だけを使って弾く“五手連弾”

第2部

「復しゅうの歌——亀井戸の森、夜は更けて」
「大杉栄追悼歌」
「関東大震災の歌」
「復興節」
「題知らずの歌」
「強制連行・強制労働の歌」
「いろはにこんぺいとう」

話＝秋山清
報告＝田川律

出演者　水牛楽団　水木陽子

金哲秀さんと〝題知らずの歌〟

田川　律

関東大震災の際行われた朝鮮人大虐殺をめぐる殺された側の歌探しを、ぼくたちがしている時、福山敦夫くんが立教大学の山田昭次さんから、耳よりな話を聞いてきた。済州島でうたわれた歌を大阪で聞いた、というのだ。早速山田さんを訪ねたところ、歌の歌詞はすぐわかったがメロディがわからない。山田さんの話では、歌詞を教えてくれた大阪の朝鮮時報社に勤めている金哲秀(キム・チョルス)さんなら知っているはず、ということで、数日後大阪を訪れた。

新幹線の新大阪から地下鉄でひと駅、東三国があらかじめ電話で教えて貰った金さんのお宅の近く。約束の時間に少々間があったので、すぐ傍のそば屋、といっても近頃はやりの立喰いそば屋のようなそば屋へ入る。大阪で生れ育ったぼくは、いつまでたっても東京のあの色の濃いそば（うどん）がおいしく思えず、いつも大阪へ着くと何はともあれ、そば屋（大阪ではうどん屋というのだが）へ入る。くだんのそば屋、壁に並んだメニューの中に〝梅干うどん〟というのがあった。暑気払いに、興味本位で頼んだら、なんのことはない、うどんの中に梅干がひとつ浮かんでいるだけのこと。でもまあ、これほど正直な命名もない。期待した方が悪いワケや。

たしか、電話では、大島、とかいう喫茶店の近くやった。と思って見廻すと、すぐ目の前にそれがある。まあ、これも東京まではめったにない喫茶店の名前や。（もっとも、近頃下北沢に「おっとっと」という名の飲み屋が誕生して、驚かされたから、この、まるで個人の家のような喫茶店に驚くこともなかった）

すぐ行きます、といわれて、リュックの中からテープレコーダーや、原稿用紙を出し、どんな人があらわれるか、いつものように、緊張して待つ。

「お待たせしました」。物静かな挨拶と同時に入って来た人は、五十過ぎの紳士。色白で柔和な面立ち。記者、というと、どうも厚顔な人がまわりに多いだけに意外の感が強かった。挨拶のやりとりがあり、それから、この〝題知らずの歌〟、それを廻る金さんの思いについて以下のような話をして下さった。

なぜこの歌が、済州島でうたわれたか、といえば、当時は済州島と大阪に定期航路があった。一九一〇年代の後半には、労働市場を求めて来てたし、二〇年代になると、植民地経営の意味で連れてこられた人がいた。歌の中の〝ウエノム〟とは、標準語や日本語に置きかえられない言葉で、〝空威張りする人、ならず者の意味。忠武公は、豊臣秀吉の軍勢が侵略した際に、それを大破した水軍の将軍李舜臣のこと。白馬はすなわち天皇が降服すること。

メロディは「もしもし亀よ」でなかったか——とうたい出されたのは「煙も見えず、雲もなく」の節。それは明治時代の唱歌の中で正確には奥好義作曲「勇敢なる水兵」。もっとも一高寮歌にも使われ、演歌「新馬鹿の唄」もこのメロディ。一番多くの替え歌を持っている、といえるほどのメロディでもある。それは韓国でも同じようで漢詩の「少年易老学難不成」も同一のメロディでうたわれていたと金さんはいう——。

わたしたちは当時、五月の第一日曜日を少年の日として、大っぴらには出来ないので、そっと林の中に子供たちが集められて、将来きみたちは——と反日思想を植えつけられたものです。だいたい一九三〇年頃のことです。わたしは学校小三、四年でした。（ずっと話していくと金さんは一九二五年生れとわかったから、とすれば三五年頃のことだ）行進しながら、この歌をうたったものです。曲なんか、エライ人が作曲でもしたらよかったのでしょうが、そういう人もいなくて、誰ともなくうたい出したようです。

もっとあとになって、ひ弱な文化人がうたったのは、ムクゲの歌、ほらあの、鳳仙花という歌です。あれは作曲もどこかひ弱ですが、それにくらべるとこの歌は、じかに、将軍の亀甲船が来て、白馬をおろす、とはっきりうたっている、力強く小気味良い歌です。

題知らずの歌

東京は地震でダメになり
今は大阪が第一だ
東京、　大阪のならず者(ウエノム)たちよ
急速に文明化したと　いばるなよ
忠武公の亀甲船が進む時
白馬をおりて降服するのは　ならず者たちよ

金哲秀さんは、この歌を何度もうたってくれた。はじめうろおぼえでおぼつかなさそうだったメロディは次第にはっきりし、金さんの白い頬も紅くなってきた。そこには五十年前、林の中でひそかにこの歌をうたって行進した少年の面影があった。数年前に脳血栓を患って、今も左半身不髄という金さんだが、穏やかな話しぶりの中に、時折りキビシイ表情が横切るのが印象的だった。

関東大震災の日々

曹仁承さんの話

一九七八年八月二七日　曹氏の自宅にて
聞き手　柳震太氏　大竹米子
平形千恵子

大震災の日

そのとき九月一日、十一時五十八分。今年みたいにこんなに暑かったんですね。私は、丁度その時、仕事がなくて、帰ってきて、友達三人と家の中でいろんな話をしておったら、どかんと音がして、なんだと思った。

私は、その時、日本の言葉も知らないし、私の国は何百年たっても地震のない国だから。近所の人がとびだして地震だというんだが、三人で外へ出られないのですよ。立っていられず、すぐたおれて、はいずってやっと外へ出て、空地に集って、五分間に三回も四回もくる地震の合間にそのすきをみて、みんな家に入って、食べ物だとか着る物をもってきて、空地にみんなが集っていると、鋳物工場の方から真黒い煙があがって、地震がきて工場でもなんでも倒れれば火をつけるようなものですよ。真夏だって当時は、マキとスミで御飯たいていたんだから十二時二分前じゃ、あっちこっちで火がおきる。地震は年がら年中くるし、水道は破裂してしまうし、火がもえだすとすごいですよね。かたっぱしから燃えて真赤に焼けた六尺のトタンが空に飛びちるんだもの、おっかないどこじゃないんですよ。火事がどんどん広がるし、家のあるところに避難していたんじゃみんな焼き殺されてしまうから荒川土手に引越せというんで、ふとんでもなんでも持って荒川土手にいったんです。空に飛ぶ焼けたトタンをみながら、大人も子供も歩きながら自分の頭の上におっこちるのかおっこちないのか、はらはらしながら荒川の土手にたどりついたんです。どこの人でもそこへ出てきたんですね。荒川土手は人でいっぱいで。

夜になってからみんなカマドをもってきてごはんをたべて、私の仲間は、そのとき、兄貴と私の友達三人と五人おったんですよ。夜八時頃になったら、俺達が坐った場所ではなくむこうの千葉県の土手のほうでワアッと騒いでいるんですよ。なんだと思ったら、悪い

人がつかまって警察に入れるんだとかデマがとんで、それでも火はどんどん燃えてくるし、火の粉やトタンがとんでくるし、こっちにおったんでは安心出来ないんですよ。一五〇m～二〇〇m位あった橋を渡って向う側へいくと、そこにレールがあって、みんなレールにあがって集ったら七人ふえて（女が二人）丁度十二人集ったんですよ。九月一日の晩はそこで過して、朝四時半になったら明るいですよ。俺の知っている土方飯場で働く人が麦ワラ帽をかぶってきたから、その二人を入れて一四名になりました。

朝四時半頃、消防署の人が四人きて、俺達を皆んな縄でもって手をしばって、私は、日本語を知らなかったが、日本語を多少知っている人がいて、それが通訳して、「もしポケットの中にナイフでもなんでも人間をさすものをもっている人がいたらここで出したほうがいい。もし出さなくてかくした場合は殺されてしまう」といったらしい。みんなナイフだとかもった人は、一人もいなかったですよ。

消防署の人は、「おまえたち、ここではいられないから寺島警察へつれていくから、おとなしくついてこい」一四名は朝五時頃になって荒川土手の木橋に足はこんだら、一日の晩にうんと殺して足はこぶ場所もないし、どうやってむこうへいくか考えきれないんですね、さあそこへ入ってみたら、本当に夢だかなんだか、一四名が、やっと消防署の人四人と、それでも前に二人、後に二人、竹の棒の先に鉄のついたトビもって中に一四人を入れて、死んだ遺体が山とあるから歩けないんですよ。ようやくこっちの橋のたもとまでくると、何人もわっせわっせいっているんです。消防署どころじゃない。もうそのときは、小学六年でも学生でも、手ぶらではなかったんでしょう。ほうちょうでも、まきわりでももって、出ているんです。一日の晩は夜だから、うまくみんなかくれてにげて、二日の朝まで生きていた人達が、二日の朝五時になると明るいでしょう。明るいから逃げるったって逃げられないんですよ。

かりにここで一人の朝鮮人がみつかれば「どこへ行くんだ朝鮮人」とどなるでしょう。どなられれば、どっちにもいかれないですよ。すぐトビで犬ころみたいに殺してしまう。

一四名いたうち、俺たち一二名はなわでゆわいてあるんだけど、朝きた二人は、麻でこしらえてある細いなわでゆわえたんです。なぜあの人たちは、あの丈夫なひもでゆわくのかとまあ腹で思ったんですが、橋のたもとへいったら、一二名は、「ちょっととまれ」といって立たせておいて、あとの二人をそのひもを引っぱって引っぱり出して、その場でチョウナみたいなもので殺しちゃったんですよ。さて、それを見たら、本当に夢だかなんだか、空をみたら空は真赤だし、それでもそのとき私は、二二才だから、若いには若いんだから、決心して、どうせ死ぬなら、おまえみたいにおとなしく殺されたくない。一人でも二人でも殺してから死のうと、こういう決心をもったもんですよ。

その橋を渡って土手へあがると、一日の夜八時から、二日の朝五時までにどの位殺したか、殺した人間を土手の上に足と足をあわせてずっと重ねて、あのね、田舎のほうへいくと稲かりをやるでしょ。あのワラを重ねたみたいにね。そういう殺し方をしてあるんですよ。荒川の土手にずーっとあるんですよ。なんともない人を二人そこでたたき殺したから、腹の内臓が出てきて腸が出てきて血がシーシーと流れてきて、本当にあれをみたら、いやになっちゃうよ。本当にいやになるよね。

寺島警察へいく前にあっちこっちいかされて、そっちへ逃げていくからつかまえろ、こ

っちに逃げていくからつかまえろ、殺せと大人も子供も総動員でやるんだから逃げる場所がないんですね。やっと寺島警察にたどりついて、今考えれば二〇分もあればいくのがね。寺島警察署にたどりついて正門前にいくと、オマワリが日本刀をぶらさげて二人いて、俺たちを警察の中へ入れたんですよ。

寺島警察で警察署の中へ入ると、早く来ている人があるからもう警察はいっぱいで、三五〇人やそこら入ったんだからね。警察署の庭へ出て、下は、じゃりが敷いてあってそこにおったんだが、はじめはまあ生命だけ助かれば腹へったってなんとかなるわと思ったんだが、二日の晩から、一昼夜でにぎり飯が一個ですよ。それでも一日はそれだけでもいいんだけど、寺島警察に一五日おったんだからね。腹がへってしょうがないですよ。水でものめばたしになるんだけどね。なんにもたべなくては、水も飲みたくないですよ。

何で切れば人間の頭がばさっと切れるかね。頭が片方、右の肩の上にのっかって、それでも人間死ねなくてじゃりの上であばれているんですよ。そういうのは医者も治療も何もしないんですよ。三日に死んだんだけど、丁度その日は八人死んだんですよ。医者が治療するのは、手切った人とかあばらを刺された人とかでしたよ。

三日間たれるだけたれた血で、警察の庭のじゃりは真赤よ。赤いじゅうたんみたいで、その上にみんな坐ったんですよ。三五〇名もね。旅館の番頭がきるようなはんてんをきた土方が多かったですよ。

私はそのじゃりの上で、九月一日の日からねてなかったので、眠くてしょうがないわけで、はんてんきて足をくんで寝入ってしまったら、いたくて目がさめてみると、庭には一人もいないの。地震はくるし、外でやじ馬がわあわあ騒いでいて、外から殺しにくると思って警察の外へみんな逃げちゃった。俺も逃げようかと思って警察の裏のへいにのぼったら、むこうの畑で、逃げたのがみんなつかまっているし、それを見たらつかまるかもしれないからそこへ下りられないし、警察の中へ入って正門のでっかい樹の上へのぼっちゃって、外をみたら、すごいの、牛を殺す屠場のようで、真赤にそまって、どうしようかと思って樹からそろそろおりて警察の中へ入っていくとおまわりが日本刀の長いのをもって警察の中でさし殺しているんですよ。その時四人殺された。さあそばにいかれないから、戻ると刊事が柔道をする白い上着で黒い帯をハラにして、桜の棒をもってなぐろうとするの。私はともかく言葉を知らないから、ともかく俺は手をあわせてあやまったの。俺の片方の手を引っぱってともかく入れってブタ箱に入れてしまった。丁度そこで女と男がだきあって泣いているの。そばにそうっと座って、俺は「どうすればこの生命助かるんですか」って相談したの。むこうは、かんかんおこって、おこるのは、あたりまえですよ。むこうでも生命助かるか助からないかわからないんだから。その晩その人達と、三人で夜をあかして、朝になるとその夫婦がいないのよ。しばらくたったら、その男が刑事ともどってきて、「夕べ検査はどこでやったの、二階で調べた人は庭に出なくちゃだめだ」というの。庭へ出たら、夕べは、誰もいなかったのに、みんなもどってきて一杯なの。兵隊が鉄砲の先に光ったナイフ（銃剣）さしているの。あゝこんどは、兵隊よんだのだから殺すんだと思って、兵隊のまん前に坐らされていては、いつ殺されるか安心出来ないと思って、そろそろと真中の方へいって坐ると、兵隊がえり首つかんでまたもとのところへ坐らせられてしまった。警察の中で会った同じ村の人と「どうするんだ、にげる他ないんだけど、俺はおとなしくやつらに殺されるのはいやだから、どうしてもやるだけやって死ぬから」と朝鮮語で相談すると、その友達が「おまえだめだよ、この人のいうことをきけば、生命は助かる。」といわれた。

二日目からにぎり飯で、ずっと一四日までね。今日一二時にくれば、あしたの一二時で本当に腹へってね。にぎり飯くばるときにおっこってこわれたにぎりめしの米粒一つ血がいっぱいのところにおちたの、今ならきたなくて食べられないのに。

習志野収容所へ

九月一五日の朝、兵隊の曹長だかが台の上へ登って、朝鮮人三五〇人の中には日本語をバリバリしゃべる人がいて通訳して、「ここにいれば二四時間でにぎり飯が一個だが、千葉県の方にいけば、にぎり飯が三度三度出るし、さつまいもふかしておやつが出るから、そこへたどりつくまで、一人でもいうことをきかなければ射殺される」と、そういう兵隊の話があって、その朝は、にぎり飯が一つと、汽車の中の弁当の分が一つとくばられたが、一人だって持っていく人はなく、腹へってみんな食べてしまった。

田舎を出るときもって出た三〇円のうち、大阪まで八円、東京まで一二円のころだったが、二二円残っていたのを、警察ははじめに調べるときとりあげて、帰るときにめめいに返してくれた。これを受取って、亀戸駅までいって、五〇名ずつ七回位に兵隊が前に二人、後に二人、亀戸駅についたときは一二時だった。駅おりてからはだしでずいぶん歩いたよ。千葉県の収容所にいたら、習志野で、一号から八号まであるんですよ。遠くて広いんですよ。日露戦争で日本が勝ったから捕虜から武器をとりあげてしまってある倉庫をみせたんですよ。ロシアの兵隊が三年の刑を受けて入ったところへ俺たちがいたんですよ。朝鮮人が三五〇〇名位、中国人が五〇〇名位、合計四〇〇〇名位、そこに四〇日余りおったのですよ。その四〇〇〇人に交代、交代で倉庫の中をみせたんですよ。

習志野へついたら、にぎり飯も大きくして、大きなまんじゅう位あるんですよ。これなら大丈夫と思って。さつま芋のふかしたのも四斗たるに山もり出るし、食物は充分あるし、腹は満腹で、それでも一日二日はいいんだけど、そこで四〇日いればやっぱりなれちゃった。

作業はさせられなかったが、ワラでもあれば、ワラジをこしらえたりした。習志野へきて、兄貴をさがしたが二日たっても三日たってもみつからないので、いきていないとあきらめた。

班は、五〇人で、八号までであって、班長が八人いて、班長は、よみかきが出来て頭の切れるやつだった。（「いくらか知識があって日本語の出来る人」…柳さん）収容所は、真中に通路があって頭と頭があわさっていた。朝六時にはおきなくちゃならなかった。

兵隊は帳面をやるだけで、ノータッチ。兵隊がいるのは、何千人もが三度三度食事をする食堂を警戒するだけ。事務をやっている人も、兵隊ではなくて、一緒にいったもんだった。四〇日間、面会に来た人はないんですよ。四〇日間、出ていった人は一人もいなくて、命令があってから五〇人ずつ青山へきて、希望をきいて国へいきたい人は国へいって、いきたくない人はのこった。私は、生命さえ助かればいいと思ったけど青山へきて、平和になると金を少しためなければ田舎へいったって親戚に申訳ないと思って残った。

青山へ来ると習志野よりまだよくて、四人

で釜を一つもらって、配給もらって、かんづめ一人いくつともらって、ごはん三度たべることになったのです。あの時の金、寄付も大変ですよ。各国から、寄附をしない国はないくらいだった。朝鮮でもあの時、一人五銭ずつ寄付したというんだから。着るものは、みんな古いんだけどほうぼうの国から日本にきたのを一人二、三枚ずつ配給してくれてそれで暮したんですよ。

四人のうちの一人が、品川に行けば知っている人がいるからと出かけていって、髪が長くてあかだらけだったのが、三日目に帰ってきて、髪は短くて着るものがさっぱりして、顔がはれて帰ってきたんですよ。「なんでおまえ顔がはれたのか」というと、五十何日満足に食べていないで、栄養失調だったところに急に食べたら顔がはれたんですよ。三人は品川に泊るところが決ったけど四人は泊れないというのでくじを引いて、一緒にいったら、なに、太田の大崎駅のそばの四軒の家で、たたみ八畳に一二人が寝ているんですよ。三人が入ったら一五人になるから大家がダメだっていうから困っちゃって、しようがないから土方をしようということになって品川駅近くの飯場へいってつかってもらった。その当時二円三〇銭もらって食いぶちは八〇銭はらって、一ヵ月二四円だった。日本人が一五人で俺たちが入って一七人だった。あのときは朝ごはんでもなんでも飯台で立って食べたんですよ。大きなおはちにあったかいごはんが入っていて、二二才の食うさかりだったから、オレは八杯まで食ったね。朝出て、トロッコおして、腹がへってね。

傷跡は今も――「国籍のある人間が一番いい」

九月二日の朝、荒川土手に来るとき、つめえりで、サージの服を着て死んでいる人が兄貴の顔にそっくりで、「俺の兄貴があそこで死んでいる」朝鮮語でいって、なわ切ってとびついたの。そうしたら消防の人が「このやろうにげる気だ」って俺のことをトビでやったの。なおるのに丁度三ヵ月位かかったよ。今でもこっちの足が細いんですよ。どうも力が入らないんですよ。

一九二二年に日本に来た朝鮮人は八万人、五万人は大阪で、二万人が東京、その後ずっと一九二五年、一九三〇年と増えていたけど。当時八万人のうち六〇五〇人が殺されたのよ。九月一日の一二時二分前だし、鋳物工場があって鉄はとかしている。家の中では、勝手でスミおこす。マキおこす。その瞬間に地震が来ているから、震度七が来れば、誰が考えても、火つけなくたって、家がたおれる、たおれれば火がつくのあたりまえだし、それを朝鮮人が火をつけたというのだから、水道が破裂して水が出なかったんだけど、水道に毒薬入れた、火をつけたというデマを流して、よけい殺されたんですよ。朝鮮人は、その当時、土方やる人が多かったんですよ。土方やって食うに追われている人が、頭つかって、毒薬を入れたり火をつけることがあるか。何もないのにデッチあげてうんと殺されたんだからね。

私はね、いくら国が小さくても国籍のある人間が一番いいと思う。日本が国をとって植民地にされて、今でも私はね、あまり人情がないと思うよ。人情があれば、人間が人間を殺すなんて、よっぽどのことがなければ殺さないですよ。

荒川土手から皆さんに訴える

岩渕の水門から千住の北をまわって東京湾へ注ぎ、荒川放水路はゆったりと流れている。関東大震災の時、多数の朝鮮人が殺され、この荒川土手や河原に埋められたことを知る人はもう多くはない。

いま、荒川の形成史を一〇年にわたって調査してきた一教師の手によって、凄惨を極めた朝鮮人殺戮の様子と、殺された人々の遺骨が放置されたままになっている事が明らかにされた。

「殺された朝鮮人の遺骨をできるだけ早く発掘し、その霊を慰さめ、真相を明らかにして、再びこのようなことのないよう消えない記録を残したい」というこの教師の呼びかけに応え、私たちはここに結集した。

私たちは、いま全国の皆さんに訴える。

一九一〇年、日本が全面的に朝鮮植民地支配を開始して以降、苛酷な収奪によって多数の朝鮮人民が故国を追われ、最底辺労働力として日本での在住を、よぎなくされた。そして一九二三年九月、東京をはじめ関東一円で少なくとも六千名以上の朝鮮人が、関東大震災の混乱のなかでなぶり殺しにされた。「朝鮮人が放火した」「井戸に毒を投げ込んだ」「集団で襲ってくる」等の官憲の意図的に流すデマに扇動された当時の民衆は、手に手に日本刀・双槍を持ち「自警団」を組織し、武装した軍隊とともに手あたり次第の虐殺を重ねた。それは、植民地の人々に対する差別・排外意識のとりこにされた民衆と、朝鮮における民族解放闘争と日本における〝米よこせ〟運動をはじめとした闘いの昂揚に恐怖していた支配権力による震災時の混乱に乗じての徹底的な殺戮であった。

私たちは、この朝鮮人虐殺の事実を正視しようとするとき、差別・排外意識を生み出した土壌を問い糾し、そのことが植民地支配を支え、民族の解放闘争を抑圧してきた事実を痛苦の思いで確認しなければならない。私たちはいま、埋もれたままの朝鮮人の遺骨を掘りだすことを通じて、虐殺の真相を明らかにしようとしている。それは、日本と朝鮮に関わる私たちの〝現在〟を問うことでもある。ここから彼等に対する慰霊がはじまる。

全国の皆さん。この運動を日本人総体の〝共同のしごと〟としてなしとげてゆく為に、共に担おうではありませんか。私たちはここに多くの皆さんの賛同と協力を訴えます。

一九八二年七月一八日

「関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し慰霊する会」準備会

故郷を奪われた人びとの歌

①炭坑――安龍漢さんの話

林えいだい『強制連行・強制労働』より

ご飯を別の皿のおかずで食べることはなかった。トウキビやメリケン粉のダンゴがドンブリの中に五、六個浮いて、白菜か大根葉が入っとるだけ。その時だけ満腹するが、腹に残る物はなくてカマキリのように細くなる。日曜日の大出し日のあとには、握り飯が三個出た。普通の日曜日は仕事をせんからいうて、オカユさんをすすらせる。私の顔がドンブリ茶碗の中に映って、その時ばかりは机に叩きつけたよ。〔略〕

昼弁当は、入坑する前に食べてしまうので、四時ごろになると腹が減って、お腹の皮が背骨にくっついた。海へでも山へでも捨ててくれ、もう殺してくれという気持になってくるよ。落盤があって即死してしまえば、この苦しみはなくなるだろうと、やけっぱちになりました。あんまり悲しいので、私の故郷の民謡〝ノレカラ〟に歌詞をつけて即興に歌った。寮や坑内でこれを歌うと、労務や坑内係は怒りました。軍歌なら感心なことだといってほめられる。ノレカラの歌を、声をださずにうなるように歌って自分を慰めたものよ。

われらの故郷は慶尚北道だよ
私はどうして石炭掘りにきたのか
日本がいいと誰がいったのか
日本へきてみればひもじくて生きられない
石炭を掘る時はひもじくて死にそう
それをいうと木刀で殴られた
このキャップよお前はどうして重いのか
俺の頭はちぎれそうだよ
腹が減ったよ母さんに会いたいよ

日本語で、「大日本帝国軍人は、戦地で三日も四日も飯を食わんで敵と戦っている。お前たちは三度三度飯を食うじゃないか」と労務が怒鳴る。

涙を流して手紙を書いた
国の母は稲穂を送ってくれた
米粒を手に取って涙だけ流すよ
風呂敷包みを解いて米粒を口に

涙を流しながら母さんを想う
屋根より高い板塀で囲まれた寮に入れられ
一日十三時間労働
涙を拭く暇もない
食事は大豆粕にメリケン粉
おかずの鰯に蛆湧いていた
腹が減って仕事が終わると足が立たない
母さんと大きな声で呼べずに
監督が怖いからそっと呼んでみた

――このあと、また労務が日本語で怒鳴る声が響く。「点呼、点呼、点呼!」「報告します。松並びに第三号室総人員十人のうち、南卸し二人、北卸し二人、左六方二人、坑外一人、向う方一人、公傷一人。以上、異常なし。報告終わり」「おい、公傷者は誰か! 前にでてこい。貴様、毎日殴られて仕事に行くのが、そんなに面白いのか。早う飯を食って仕事に行け。行かんやったら、労務にでてこい!」

十四歳の少年は体が病気で
ある日休もうと思ったら木刀で殴られた
坑内を追い回されて天井が崩れて
その時死んだよ
掘り出して少年の手足を揉みながら
涙を流して名前を呼んだよ
監督は木刀を持って
少年の遺体を放ったらかしにして
石炭を出せ　と命令した

――次に日本語で。「大日本帝国軍人は、戦地で自分の友だちが死ねば、それを盾に敵と闘っている。お前たちは、一人死んだとてそれにたかって泣いておって、戦争できると思うちょるのか! ケガした者はみな連れて上がってやる。治療がすんだら戻ってこい。死んだ者は、仕事終わってから函回してやる。それから上がれ!」

この話を聞いて胸を叩きながら
国を奪われた民族は
なぜこのような悲しみを受けるのか
みんな一緒に木刀で殴られてもいいといい
かれらの生命は誰が守ってくれるのか
函を返して石炭を放りだし
死体を積みだし
死んだ者は多いのに
葬式は一度も見たことない
……

②紡績女工――三人のオモニの話

金賛汀・方鮮姫『風の動哭』より

夜の仕事も内容は昼の仕事と同じことですから、べつだんどうということもないのですが、夜の十一時ごろからものすごく眠たくなるのです。眠くて眠くて、機械の前で立ったまま眠っている人もいます。そんなとき、工場を見廻っている〝見廻りさん〟と呼ばれている監視人が手に持った細い棒で肩のところを小突いて眠りをさまさすのです。見廻りさんはしょっちゅう、五分に一回ぐらいの割合で見廻ってきますが、その五分間ぐらいの間にうつらうつらと立ったまま居眠るのです。そして肩や背中を小突かれてハッと目をさますのですが、それがあまりたび重なると見廻りは棒で殴りました。

この〝見廻りさん〟には朝鮮人もいました。しかし、監視人ですから、やることは日本人と同じでしたし、朝鮮人同士だからといって手心を加えるということはありませんでした。日本人と同じようにしなければ、見廻りからまた女工にされてしまうから、朝鮮人の見廻りのほうが、かえって同胞にきびしかったように思います。

工場ではよく糸を切りましたが、糸を切るのがたび重なると殴られました。そんなときは悲しくて、腹が立って……。そんな悲しみも怒りも歌を歌ってまぎらわせたもので、日本語の歌をいくつか歌いました。……こんな歌です。

ネングのネングのすずめさん、
運転ぶくろに豆入れて
涙こぼして、ハタの中

こんな歌を皆で歌ったものです。(梁漢淑)

工場ではよく歌を歌ったものです。歌を歌って、悲しみや、腹立たしいおもいや、親や兄姉をおもってせつなくなる気持を抑えたのです。歌は朝鮮語で歌うのですが、

工場で糸をつなぎ
糸屑かぶってまっ白になり
糸を引く仕事をして
真白になって働き
部屋に帰っても
知らぬ他郷で親もいず
ふるさと想い胸が痛む

そんな歌を歌っては、ふるさとや親をおもい、工場でのつらい生活をなぐさめたものです。(鄭在順)

監督という奴は仕事中にはいつも怒っていましたね。私ら日本語がよくわからないので、怒鳴られても、怒られているというのはわかっても、何を怒っているのかわからないから、黙って聞いていて……。

私らのように大人になってから工場に来たものは、それでも我慢できたが、子どもたちはかわいそうだった。十歳ぐらいの女工は機械に手がとどかないので、手をとどかすために背伸びして働くので、足元がふらふらして、それで、仕事もはかどらないと監督がきて殴りつけるのですよ。子どもたちは泣きながら機械を回していたが、悲しいと歌を歌って悲しみをおさえていました。

監督だといって威張るでないよ
糸繰りを数える人、機械を扱う人
あんまり威張るな
五年もたてば、紡績がなくなれば
お前もわたしも、同じじゃないか

こんな歌を朝鮮語で歌うんです。監督の奴は言葉がわからないので最初は「何を歌っているんだ」といっていたのが、だんだん自分たちの悪口をいっているのだなとわかってくると、「こら、歌を歌うな」と怒るけど、知らん顔して歌を歌っていると、そばにやってきてこづき、「歌うなというのに聞こえないのか」と怒鳴るんです。私ら知らん顔をして「何も悪いことしてないのに、なんで歌を歌ったらいけないのか怒ることないでしょう」といっても歌わせませんでした。それ以上歌うと殴られるので、女工たちは監督が行ってしまうまで歌いませんでしたが、姿が見えなくなるとすぐに歌ったものです。(全貴南)

③広島——被爆徴用工たち

深川宗俊『鎮魂の海峡』より

広島の焦土に、焼け跡のトタンや焼木を囲っては、バラックが建ちはじめた。だが原爆症で死んでゆく人びとの絶えない日々、夜になると、陰火のような炎が二すじ、三すじと立ちのぼる。それはヒロシマの死者を焼く火なのだ。

九月に入って、盧聖玉君の手で、やっと残

留者の帰国のめどがついた。広島鉄道管理局から九月一五日広島駅乗車の指定がとれた徴用工たちは、朝鮮のふるさとへ向けて、九月二〇日までには帰郷できると手紙にかいた。

いよいよ広島を出発するという前日の夜、徴用工の幹部たちの別れの会が寮の一室でひらかれた。日本人で招かれたのは私ひとりであった。南観音町の畑からもどってきたウリやナス、それに彼らがどこからか仕入れてきたドブロクのささやかなうたげである。

聞慶鳥峠の斧折れの木は
せんたく棒で　すっからかん
使えるような男どもは
徴用徴兵で
すっからかん

苦渋にみちた三六年間の日韓「併合」の歴史。その中で朝鮮の若ものたちが背負わされた代価は、はかりしれないものがあった。どんぶり茶碗をたたきながら朝鮮人小隊長のひとり金忠煥（日本名＝金城）は、あふれてくる涙をじっとこらえているようであった。盧聖玉たちは、くちぐちにこんな日本にいてもだめだから朝鮮へくるようにと私にいってくれた。孟鏞模は「私のところはウナギがたくさんとれる。帰ったらすぐ手紙をするからぜひきてください」という。歌いながら、踊りながら、若もののうたげは夜ふけまでつづいた。

④済州島——海女のたたかい

高峻石『越境』より

済州島の女性たちがよく歌う「離虚島の歌」は、任期を終えて陸地に帰る「喰いつめ者」を見送る女の悲哀・因縁のはかなさを嘆いた歌であるともいわれている。

離虚　離虚　離虚島しよう
ひとの心　どれほどあって
六月の夜　ひとり寝するの
泣こうとしても　溜息が出て
涙もしぼれないよ

この歌の「離虚　離虚　離虚　離虚島しよう」、すなわち虚しさから離れよう、虚しい島から離れようという連句は、女の悲哀・因縁のはかなさを嘆いたものであるばかりではない。日本帝国主義下の全過程をつうじて、この歌がよく歌われた事実をもってみても、この歌は済州島人民がその悲惨な生活から脱出しようとする心情を現わしたものとみてよいだろう。

私の幼い頃、済州島の海女たちは海女労働を天職であるかのように誇っていたが、それは生きていくためであった。しかし海女労働は一般人には想像もできないほどの重労働であった。海女労働は、真冬を除いて春・夏・秋の三季におこなわれ、毎日五—一〇時間も海水に身体がしびれるほど浸し、息が切れるまで海底にもぐる。これはまさに重労働以上の重労働であった。海から上がってきた彼女たちは、長年馴れている者さえ、寒さに身体をぶるぶる震わせながら倒れることがしばしばあった。彼女たちは済州島の海ばかりでなく、陸地の釜山、蔚山、麗水、元山などのほかに日本の対島、和歌山県、静岡県などの海にまで出稼ぎに出て行ったが、彼女たちの労働の苦痛や悲哀は歌としても数多く歌われていた。そのなかの一つ。

なんの八字（運命）で　こうなり
なぜ母は　わたしを海女にしたの
誰に言おうか　このことを

考えれば考えるほど　涙が出るよ
幼い子供と離れ　夫と別れて
数千里の他郷に　この身をさらす
おカネのためとはいえ　わたしは悲しい
誰を頼って　生きればよいのだろう

そして彼女たちはひと夏稼いで帰郷するときに、身内や親しい人たちのために手拭いや縫針などの「おみやげ」を買い求め、いくらかの現金を持って帰るのが誇りであった。しかしその金額は、彼女たちの衣服一着分（チョコリ＝上衣とチマ＝スカート）に該当する程度にすぎなかった。それでも、幼年結婚の女性たちや家庭の主婦たちは、高利貸からの借金を返したり税金を払ったりするために、出稼ぎに海を渡って行った。しかし、彼女たちの「おみやげ」の手拭いや縫針などが稼ぎ高を表示しているように、自分の衣服一着分が稼げれば「上の部」に属するといわれていた。親の襲衣（死者に着せるもの）一着分を稼ぐのには三年間も出稼ぎに海を渡って行かなければならなかった。襲衣とはいうもののカネ持ちの死者に着せるような絹織物のものではなく、麻織物であったが、部落の娘たちの親にたいする最高の孝行の贈物は親たちの襲衣であるといわれていた。

済州島の共産主義者であった姜昌輔、呉大振、李益雨らは、一九三一年頃に朝鮮共産党再建グループをつくり、民族解放闘争の一環として海女たちの闘争を組織するようになった。それは、労働者農民運動を組織することも重要であるが海女たちも労働者であり、しかも彼女たちが最も悲惨な境遇に追い込まれていたからであった。当時の海女たちの境遇については、次の済州島民謡によく現われている。

わたしたちは　済州島の哀れな海女たち
悲惨ないとなみ　みなが知っている
寒い日　暑い日　雨の日にも
あの海　波の上でしびれる身体
朝早く家を出て　たそがれに帰り
幼い子に乳のませ　夕飯をつくる
一日中働いても　稼ぎは僅かで息がつまり
生きようとすれば溜息ばかりで　眠れない
早い春　故郷山川を離れ　父母兄弟と別れて
全家族の命の綱を　この身が背負い
波高く　恐ろしいあの海を渡って
朝鮮各地　対馬に出稼ぎに行く
学びのないわたしたち海女の行く先き先き
あいつらが　待ちかまえていて
わたしたちの血と汗をしぼりとる
哀れなわたしたちの海女　どこへ行こうか

この歌にも現われているように、いたるところに海女たちを搾取する機関が設けられてあったが、済州島内の主なものとしては官制の漁業組合・海女組合であった。この漁業組合と海女組合は、海女たちが採取した魚貝類や海藻類を独占的に安値で買い集めるばかりでなく、組合幹部の横領・不正事件が絶えなかった。（略）

そして一九三二年一月十二日、海女七〇〇余名が旧左面細花里に集結し、当時の日本人島司（島の行政官）・田口と海女代表三〇名との談判がおこなわれ、これに、坐込み長期戦に備えて食料を背負い水中眼鏡をかけビーチャン（あわびとりの鉄具）を手にした「武装スタイル」の海女たちがデモをかけた。さらに数千の群衆が集まってきた。群集が田口島司の身辺を警備する警官隊を完全に威圧したので、田口はびっくり仰天して海女たちの要求条件をすべてのみ込んで屈服した。海女たちは、かちどきをあげた。

水牛楽団のページ

六月からは夏休みのような感じで、このページも休んでしまった。八月までやったことをかいておくと。

六月十九日（土）には早稲田大学音楽同好会の主催で大学構内にテントをはってコンサートをやった。二百人以上の人でテントはいっぱいになった。いろいろな歌二十曲で二時間のステージ。

おなじ日、バンコクではカラワン楽団が六年ぶりにタマサート大学講堂でコンサートをひらいた。三千人（一説では一万人）がつめかけ、切符はプレミアムつきで売り切れた。禁止されている「人と水牛」からはじまったステージに聴衆は熱狂した。

七月十五日（木）、水牛楽団教室第一期が終わった。水牛楽団がやっているような歌やその背景について話をきくだけでなく、アンクルンやパンの笛で合奏をこころみ、最後は民衆の生き方について討論した。

七月二十三日（金）、川崎市高津市民プラザで生活協協主催の「平和と生活のつどい」に参加し、音楽を担当した映画「こんにちはアセアン」（土本典昭）上映につづいて、コンサート、最後に「うなぎ踊り」で、子どもたちとも踊った。

八月一日（日）、原宿の茶房ナームで樋口健二写真展のオープニングのための、シンポジウム・コンサート。「だるまさん千字文」（矢川澄子・詩）をふくむ十曲あまり。パネラーは樋口健二、丸山照雄。

八月十一日（水）、静岡市で美術展　Art Space'82 でコンサート。

八月十五日（日）、俳優座劇場、林光の企画構成するコンサート「死んだ兵士のバラード」に参加、ベラウと日本の反戦歌をうたう。

八月三十一日（火）、ポーランド資料センターと共催で、グダンスクでの「連帯」誕生二周年記念集会。

九月一日（水）、あたらしいシリーズ「水牛社会科コンサート」第一回。（本文を見よ）

九月三日（金）と四日（土）は、石井かほるさんの「まんだらうた」の音づくりに協力することになっている。草月会館ホール、ロビー、石庭、となりの公園をつかって、日本のわらべうた、谷川俊太郎のわらべうた、インドネシアのわらべうたを、うたい、踊り、竹の楽器を演奏するいくつかのグループの構成。

九月五日（日）、女二人、ふたたびタイへ。カラワンとともに。

九月二十九日（水）、三十日（木）。水牛音楽教室第二期。ワークショップ。グループで歌をつくり、演奏するまで。場所は四谷三丁目のイメージフォーラム。水曜クラスは六時半～八時半。木曜クラスは朝十時半～十二時半。十一月三日と四日は休み。十一月二十四日と二十五日も休み。最終回は十二月十五日と十六日。十回の参加費は一万七千円。

モンコン・ウトックと水牛楽団のテープを近日中に発売したい。タイの歌十二曲。

水牛楽団も活動を再開してから二年になる。いつまでつづくかわからない、とおもいつつ、いつまでもなんとなくつづいている。これで生活ができるようにはなかなかならないが、まだ飢えて死んだ人はいない。

強制連行された少年の歌

韓到得さんの話

韓致得　一九二四年五月十日慶尚南道迎日郡只杏面霊岩里に生まれる。
現住所　山形市幸町一―五三（サウナ山形）
（一九七五年七月二九日、米沢で聞きとる）

私は母が四三歳の時（一九二四年）に生まれました。父母および兄弟六人家族で、兄弟は男三人、女三人で、自分は末子でした。父と母、長兄は二〇年前なくなりました。現在故郷には二番目の兄がいます。家業は漁業で網元にやとわれていた。

一九四一年に面から何人出せ、徴用に出せと言ってきたのです。私の場合、本当は一番上の兄貴を徴用に出せといわれたのですけど、長男坊が行かれると家の立場が困るし、私が代わりに来たのですけどね。

来たのが岐阜なんですよ。連絡船の中では刊事が何人おったかわからなかったですけど、下関に降りて汽車に乗ると、こっちの方に二人あっちの方に二人いるわけです。わしら三〇〇人来たですけど。

只杏面の面事務所に連れて行かれ、浦項に集合しました。そのとき三〇〇人でした。

村で人を集めたのは面の役人と日本からきた労務係でした。村は八〇戸ぐらいしかなかったが、四人連れ出されました。

浦項では警察署長が演説し、「行ったら、一生懸命二年間やったら、給料もよくやるし、日本のために働いてこい」といいました。浦項ではすぐ衣装をぬがせて、青い作業服に戦闘帽子です。

釜山までは日本語のできる人を班長として団体を組んだですね。トイレに行くとき、必ず日本人がついてきました。日本人は八人いて、ヤスイという男が責任者でした。汽車は貸切りでした。汽車から脱走する人はいませんでした。待遇をよくしてやるとかいって、瞞されたのではないかと思いますがね。

日本に来て、猪谷（富山県婦負郡、高山本線沿線）の鉄橋はすごく長いですよね。そこに来たときは一台に十人ぐらい乗せたトロッコみたいなもので、何十台か何百台を機関車がひっぱってきたとき、下を見たらば高いでしょ、あゝこれじゃ死に行くんだといって泣いた人も相当おりましたよね。山奥の浅井田というところの水力発電所建設工事に連れてこられたのです。船津町（現吉城郡神岡町）からしばらく行ったところですね。そこへ来る途中猪谷を通ったのです。そこは汽車が通らないですから、トロッコだったです。

現場近くに来て全部集まったです。狭間組と大林組の責任者が何百人と出ましたね。大林組は水をひくトンネルをつくる仕事ね、狭間組は外の仕事――バラスをわったりする外の仕事です。わしら狭間組に廻されたからね。狭間組と大林組に半々ぐらいに分けたわけです。わしらは狭間組の池田配下に入ったのですけどね、飯場が十六ぐらいあったです。

飯場は板の上にござをひいて、枕は丸太棒ですね。長いやつ、朝、片方をもちあげれば、いっぺんに起きちゃいます。ふとんはふつうの木綿で、敷ぶとん一枚。一組に二人ずつ寝る。

食事は小麦と大麦、それからとうもろこし、米――米は十分の一入ればいい方じゃないですかね。大麦はつぶしたやつですよね。朝はおしんことおつゆ。おかずがいいなと思うときは大根の千切りですか、乾燥したのを味つけしてね、魚はめったに出ないですよ。どんぶりに計りめしでした。

朝六時に起きてね、御飯をたべて八時に現場に行って晩の五時まで、二番交替は六時から朝の八時までだったと思います。大体一二時間労働です。

それで一番つらかったのは、地下足袋がなかったから、岡足袋にわらじをはいて、巻脚絆をまいて、大体膝までつかって水の中で仕事をします。水の中に入って仕事をしているときは凍りませんが、上ってきたらぱりぱり凍りますよね。

手紙を出すときも、封をしたら駄目なんですよね。中味を入れて検査してから出す。向うからくる手紙も全部きって見て、それからわしらに渡す。

それで三ヵ月間辛抱して仕事したですけど、あんまりつらかったし、わたしは当時十七歳でしたし、いっぺん逃亡したんです。高山へ行ってつかまったですね。ちょうど、そのとき二月でしたね、雪が十五、六尺つもったですね。

ここで一番つらかったのは、朝が早いですしね、一つの線路にトロが三十台ぐらい入っているですよね、それを早く出さないと、後が入ってこないです。積まないと、後の車が入れないのですね。わしら、一つのトロに二人で仕事をするのですが、わし、一番小さいから、積むのが間に合わないですよ。助けてくれる人はいないし。それが一番つらかったですよね。上ってきたとき、足のいたさね。つめたい水の中に入って仕事をしてきたからね。晩に帰ってきて痛さがとまるのに、朝までかかりますよ。当時長靴も地下足袋もなく、岡足袋にわらじだったですからね。

水力発電所に来たのが一〇月の二二日、来て翌年の二月、そうした頃そうしたことしたから、つらくて逃げたです。二月二十九日だったですか、夜逃げて朝つかまったです。検問所をうまくくぐって逃げたのですが、つかまって大分ヤキを入れられましたね。飯台の土にまっぱだかにして寝かしておいて、それでみんな集めておいて、百五十人ぐらいだったですね、それを集めておいて、ヤキのいれかたといったら、いまとしては何ともいえませんね、まっぱだかにして、逃亡したらこういうめに遭うんだといいながら、たたくんですよ。御飯をたくに使うスコップのような長いしゃもじでたたくんですよ。四十二三たたかれるまでは記憶があるのですが、部屋に入れられて、みんながすわっているし、畳をあげて水をかけていたから、わかったのですが、その

とき意識を失なってね、ござをあげてねかして水をかけていたのですね。意識を回復するとまた、たたかれて、そんなことを三回ぐらい繰返しました。

狭間組の池田配下に石黒という奴がいたですよ。これがすごくたたく役割をしていましたよね。これは二十七、八だったですがね。労務係全部の責任者です。

逃げないように検問所がありますけどね、山を登って、岐阜県の浅井田というところは雲が山の真中あたりにくるのです。こんな天気の良い日でも一日に雨が二、三回降るのですわ、高いから。その山を越えて行くのです。おそろしさというのはわからなかったですね。つかまったら殺されるという意識があったものですから。やっと逃げていったと思ったらつかまってしまってさ。高山の市内に行ってつかまったです。すぐわかったですよね。夜歩いたものですから、靴まで全部ぬれてね、鳥打帽子をかぶっているのにつかまってね。それでもうすぐ早いものですね。刊務所を脱走した人間をつかまえるようなもので、すぐ連絡してね、飯場には警察官が夜も廻っていてね。

つかまって後、仕事をしないとまたヤキを入れられるから、仕事をして、二月ぐらいしてまた逃げ出したです。また逃げたのが成功したですよね。

逃げたとき、いい人にぶつかってね、その人が日本人だったですけれどね、その人がが連れてきてくれたのが小国町（山形県西置賜郡）の長者原というところでした。ここも水力発電所の工事場で、これも狭間組でした。助けてくれたのは鈴木という人でした。その人は人夫を募集して長者原に送っていたのです。それでそこに来て十月五日に降りてこないと、雪がつもって降りてこられないので、降りてきたのが小国町、そのとき、今のバラックです。

鈴木さんに会ったのは、船津町の三井金山（神岡鉱山）に逃げて、そこに徴用できた人がたくさんいたのです。火薬を背負って火の中に入ったようなものです。とんでもないところに来たと思って、そこで助けてくれといって入って行ったのが鈴木さんの家だったのです。どうなんだというので、こういうわけでつかまったら殺されるから一つ助けてくれといったら、丁度いいあんばいだ、いいところに連れて行ってやるからというので、その人が一緒に汽車に乗って、そのとき一緒に七、八人つれてきたのです。現在山形にいる人もいるけど、そこで一緒に働いたのです。

小国に来て日本電興小国工場の仕事をしたのです。この会社がまた普通の会社ではなくて、住んだバラックは一〇〇ワットぐらいの電球をつけても一〇ワットぐらいの明かるさしかないのです。そのバラックは朝鮮人しか住んでいなかったです。夜でも貨車が入ったら起されて、貨車降ろしたり、カーバイトを割って一トン貨につめたり、鉄をとかし残った石とか砂を割ってトロにつんで投げたですよ。

私は協和会手帳をもっていないので、警察に呼ばれました。お前、逃亡者か、密航者かというわけです。嘘を言ってもどうにもならないから、徴用で来て二年間を勤めて終ってきたといっても通らないですね。協和会手帳をもってないから。それで山形壮丁練成所に行けば協和会手帳をやるからというので、五十川の訓練所に行ったわけです。八十人でしたか、青年ばかりでした。

朝四時に起きて大体五分間で顔を洗って御飯くって、巻脚絆をまいて、きちっとして行かないと、罰を受けるわけです。それで鉄砲かついで一日中とんで歩くのですね。御飯は

小さいどんぶりに三分の一ぐらい。それで午後二時から五時頃まで炭鉱の入口のどろ運びさせられました。晩の九時まで鉄砲をかついで、九時から肝試しです。五十川の高い山の上に墓があります。そこへ一人で行って自分の戦闘帽を置いてきて。次の人がそれを持ってくるわけです。それで途中軍隊の連中が林の中にかくれていて幽霊のまねをしたり、鳥の声を出したりして、肝を試すわけです。あそこは今でも行ってみたいと思います。

集められたのは、山形県内の朝鮮人青年全部です。十七、八歳から二十一歳の青年ですね。

ここも手紙は全部は検査です。書いてから出してくれと先生に渡さなければいけないのです。先生は伍長と傷痍軍人ですね。

皇国臣民の誓詞や教育勅語、軍人勅諭を暗誦させられました。小国町から行ったのは全部で五人です。もう帰国していないですけれどね。

勅語などは暗誦できないと、往復ビンタでした。だから便所へ行ってもそれを練習しないとね。三ヵ月訓練を受けました。簡易学校に行っていたから、日本に来るときから日本語ができました。

それで練成所の隣にいいおばちゃんがいて、こげためしをにぎりめしにしてよくくれたです。腹がへってさかんにたべるときですからね。御飯は少しで、鉄砲をかついで山を登ったり降ったりするわけでしょう。そのにぎりめしを夜たべるのが楽しみでね。それがいっぺん見つかってさ、罰を受けたことがありますよ。おばさんはトンネル工事をやっている人の社宅に住んでいた人でした。かくれて行ってお願いしますと言うと、にぎってくれるのですよ。つまり炭鉱労働者の奥さんですね。

そこには徴用で連れて来られた朝鮮人も、たくさん働いていたということだけれども、わしら日本人が住んでいたところしか知らないですね。

そこ終っても協和会手帳をくれなかったし仕事もきつかったので、また逃げて神奈川県の与瀬に行きました。カブキ組の仕事をしていたのですが、朝三時頃、トラックが三台きましてね。奥さんも、おやじも、片っぱし連れて行ったです。着いたところが中野警察署。そこで協和会手帳を持っているものは帰えしました。わしは協和会手帳を持っていなかったので、ブタ箱に九十日間入れられていました。畳二枚ぐらいのブタ箱に二十人ぐらい入れられたから、夜寝られないですよ。夜も昼もすわりっぱなし。そしてそこで一番つらかったのは、洗面器一ぱいで二十人が顔を洗うのですよ。タオルは足をふいたようなので、全然干さないから、その臭味といったら、何ともいえないですよ。そこでも御飯は卵一つのにぎりめしです。そのとき酒田の崔さんが会いにきて面会は許されなかったけれど、弁当を二つ差入れてくれましたよ。崔さんとは小国で知り合ったんですよ。

樋口という特高主任がさびしいと、一人ずつ柔道室にひっぱり出して、柔道の練習にたたいたり、投げたり、長い物さしでたたきました。

そこで帰えしてくれず、お前らもう一度徴用へ行かなきゃ駄目だといって、川崎の小田栄町の飯場に行きました。便所汲みをしました。私の分担は鋼管通一丁目、二丁目、大島町でした。リヤカーに樽十本積んで、鋼管通一丁目から上へ登ると海があり、船が着けています。こやしを船にあげて、みんなあけたらまた汲んでくるわけです。汲んで金でなく券をもらうのです。その頃は桶に入れて天秤棒でかついだわけです。当時十八歳だから、ふらふらですよ。中野警察署につかまった八

十人ぐらいがこの飯場に廻されたのです。給料は一銭もくれなかった。ここで二年間まじめに働いたら協和会手帳をやるといわれた。市役所の下請け仕事です。監督するのは憲兵です。食物はとうもろこし、高粱に小麦、大麦、米を少々、しかも、その残った冷飯でお粥をつくったのですね。くさっているわけです。そのとき私は日本語ができるので班長をしていたわけです。お粥を馬穴に入れて副班長と一緒に川崎警察署の特高主任のところへ行って、「あんた風邪をひいているのか」といったのです。すると「なんだ」というわけです。「あんた約束がちがうじゃないか。こんなくさいものを食わせて、こんな約束じゃないだろう」といったのです。「それでは明日よく言っておくから」というので帰えったら、翌日事務所に呼び出され、憲兵に「この野郎、仕事もろくにできないくせに、とんでもない奴だ」といって、憲兵の長い剣でたたかれたです。そのいたさといったら、何とも言えなかったです。一つたたくごとに、一つ二つと勘定したら、あの野郎ますますたたくのですよね。あれだけヤキが入っても三日後に仕事しないと、大変ですわ。

そこで三ヵ月ぐらいこやしを汲んで、知っている人に会い、おれのところに来いというので、汽車賃をもらって逃げたのが山梨県の塩山です。その友達が李文吉というのです。押入れの中で半年ぐらい生活していました。塩山ではダム工事で朝鮮人も相当いました。李さんもそこで働いていたんです。自由労働者の朝鮮人が働いていました。

或る人が言うには沼田の海軍工廠の軍需工場へ行けば協和会手帳がなくても大丈夫だというので、沼田に行きました。トンネルが四方八方に分かれていて、それを掘る工事です。今でもその穴はあるそうです。現場監督は一等兵か二等兵です。そこで兵隊検査を受けました。第一補充兵山砲兵で、一ぺんで甲種合格だったですよ。

すぐには軍隊にひっぱられないで、草津から少し降りてきたところで特別訓練を受けたですよ。草津と長野原の間で小さな駅がありますよ。草津から軽井沢へ小さな電車がありますが、草津から降りてきて嬬恋の次の駅です。夜三時頃起されるときもあるし、二時頃起されるときもありました。ぱっと起きて飯合に御飯を炊いてすぐ仕度をするのです。日本人も朝鮮人も兵隊検査を合格してすぐに戦争に出られるようにするためです。訓練をしたのは少尉とか中尉です。

沼田には朝鮮人が四五〇〇人、中国人捕虜が五〇〇人おりました。中国人捕虜の待遇は悪くてふらふらでしたよ。朝鮮人は自由労務者でした。

そこではたいして仕事はしなかったです。訓練を受けに行ったりしている中に終戦になりましたから。朝鮮人と中国人には絶対接触させなかったです。

ここでも食事は悪かったですね。高粱とさつまいも、じゃがいもだったです。終戦になって防空壕をはいでみたら、米が何百俵もあったし、地下足袋もあったし。わしらにくれなきゃならないものがあったですよ。

ここでも隠匿物資を出せとか、未払賃金を払えといった運動はあったけれども、協和会手帳をもたない人とか、徴用から逃げてきた人が多いから腰が弱かったですね。

八月十五日は、上田からの帰えりの汽車の中でした。軽井沢に午後二時に着いて汽車が動かないのです。みんな降りて泣いたりして天皇陛下のことばをきいてね。汽車は二時間もおくれました。現場に帰ると終戦になったからというので、仕事は停止になりました。そんときは現場へ行ってみたら監督はみんな

いなかったですよ。配給係もいなかったです。上から仕事を受けわたしした人のところへ行ったら、米はあるし、地下足袋もありましたよ。上で仕事をした人は一人もいなかったですよ。そこも狭間組でした。

草津には日本鋼管株式会社がピョンヤンから三〇〇人徴用してきて鉄の原料を掘っていたのですが、そこでつらくて沼田に大勢逃げてきた人がいたですね。逃げてくるとき私も誘導したことがありますよ。草津の山の上に飯場がありましたが、ここは全部徴用できたんです。自由労務者は草津の町から約一里登ってきたのです。私も草津に行ったことがあります。沼田にいた人は朝連の誘導で帰国しました。

軽井沢では何人か朝鮮人がいましたから、わしらよろこんでヤンサンドやアリランを歌いました。日本人でほとんど泣かない人はなかったですよ。わしら圧迫され、弾圧された民族ですからね。うれしくておどったり、歌ったりしたですよ。交番の前をふつう歩けなかったからね、前を歩いたら「お前ちょっと来い」ですからね。入ったらいろいろ質問するでしょ。頭を絶対のばすことはできなかった。坊主刈りでなければいけなかった。

補足

徴用にひっぱられるときは日本へ行くのだからいいじゃないかという気持もあったけれども、来てみて徴用というものはどういうものかわかったですよ。徴用になったのはこの地方ではわしらがはじめてでした。お母さんが別れるとき五十銭くれたですけど、そのかなしさったら何とも言えなかったでしょ。わしらそのとき子供だったから何もわからないしさ、日本へ行ったらいいじゃないかという気持でいましたが、下関に降りて猪谷の鉄橋に来たら、いよいよ死ぬところに来たと思ったですよ。飯場で悲しい歌をつくったこともあります。雨が降ろうが雪が降ろうが、仕事に出なければ大変ですよ。

첫일보에 멍들아서
상처받은 내가슴이요
젖어진 우장처리 젖어진 우장차리
몸에 걸치고
비오는 폭우에서 바람찬 한 강에서
도로오시를 합니다。

はじめての日本で心傷つき
傷受けた私の胸だよ
濡れた蓑を 濡れた蓑を
からだにまとい
はげしい雨が降り 風がつめたい川で
トロ押しをします。

これも私一人でつくったのではなく、村からきた四人の人たちとつくったのです。私の村では尋常普通学校を卒業した人も二人来ていましたからね。

今だから笑って歌えますけど、その頃逃げてつかまって板台の上でのたたかれ方とか、あの真冬に朝六時に起きて御飯を仕度してたべてすぐ現場へ行ってさ、おつゆもつめたいしね、まるっきり貧乏性生活と同じじゃないですか、そして川の中にすっぽと入るのですから。氷をたたいて割って入って、砂と玉石石をトロにつめて押して行くわけです。

過去を二度と繰り返してもらいたくないし、なるべく日朝親善をしてもらいたい。終戦後十年ぐらいは恨みといったら語弊があるかもしれないけれど、恨みがぬけませんでした。

日帝に対する抵抗の歌

任東権
仁科健一訳

日清・日露両戦争は韓国の国土内で行なわれて、周囲の風雲は思いがけぬほどに急を告げた反面、韓国の勢力は傾き、沈滞状態に陥った。一九一〇年八月二二日にはついに日帝の兇悪な計略により国をすっかり奪われてしまったことで、民族の桎梏となる生活がここから始まった。社稷は崩壊し、長い間の文化の伝統もあっという間に恥辱の身もだえの中で奪われてしまった。国は新しい主人をむかえ、百姓はよるべき所を失い、うれいと憤りと悲哀の中で生を営んだ。さらに日帝は、善政をしくよりは自己の野欲を充足させるために、韓民族の意思は参酌せず人権を無視して、極端な植民地政策を実行するに至った。平穏な生活を満喫していた韓民族に、新たな制度と法律が入ってきて生活と精神を刺激しわずらわせたのだ。そのため民衆は、日帝に対して決してよい印象をもてなかった。日本人が韓民族に対する時に「ヨボ」と称し、自己の意にそなわなければ「不逞鮮人」と言ってさげすんだ。平和を愛する韓民族もこれには憤激したので「ウェノム」または「チョッパリ」と応酬した。また、しばしば子供たちが争う時に「なぜ우여(ウォ)腹がへって위(ウォ)」という言葉が流行した。これは直接には相手方を嘲弄する言葉だが、「倭(ウェ)」と音が通ずることから、やはり日帝に対する意識的な抗日思想からでた言葉だ。こうした例は、互いに融合しえぬ感情の対立を露骨に表現したものだが、このような不満が民謡を通じてあらわれる場合もあった。

石炭木炭燃える
けむりはポッポッあがるよ
私の胸燃える
けむりの一つも出んよ

この民謡は併合がもたらした絶望と、内部から湧出する憤怒を歌ったものだ。力なき弱者の悲しみをわが民族は数度経験したが、それでも国を全く奪われることはなかった。それに誰も国の滅亡を悲しんで悪らつな計略を弄する日帝に呪いがかかることを願ったのだ。石炭や木炭が燃える時、けむりが出て火が燃えるということを外部からも見て知ることができるが、亡国の恨に沈んだ韓民族の胸の内には民族的憤怒のほのおがさらにあかあかと高まりこそすれ、けむりは一つも出ないというのである。

南山のふもとに停車場つくり
十三道の豪傑が集まってくる

併合は社会的に多くの変化をもたらした。昔は十数日かけてこそ往来できた道だったが、機械文明の所産である鉄道の敷設は一つの驚異に他ならなかった。また、これが演出する社会的悲喜劇がたくさんあった。南山の下に停車場ができて、全国から集まってきた豪傑たちがみなソウルに集中する新たな世相を諧謔的に表現したのである。平和な心にも今は静寂はなく騒乱に満ち、世紀の風潮に圧倒され人々は都会をあこがれソウルに集まったり、遠く日本にまで留学や出稼ぎにでかけていった。だが都市に出た彼らは、例によって異なった人間である日本人と直接的または間接的に、生活上の接触をもった。征服した勝利者として、植民地でのみ見ることのできる無頼と横暴をほしいままにする彼ら日本人に対して、決してよい印象は持てなかったことから、民族意識が不平と抗拒により爆発し、三・一運動がおこった。

咸鏡道元山が住みよいけれど
ウェノムうるさくて住めやせぬ
仁川済物浦が住みよいけれど
ウェノムうるさくて住めやせぬ

この二つの歌は元山と仁川。舞台はちがってもウェノムに対する反感を歌ったことは同じだ。機械文明の恵沢をうけ仁川港と元山港が立地条件がよく急速に発展して、いろいろな面で住みやすいが、ウェノムが大手をふって歩いているせいで韓国人は生きられないというものだ。行政と警察の支配権が彼らの手中にあり、財政力が貧弱なわが民族には、自由も栄華も一獲千金も画餅にすぎなかったので、なんで不満がないことがあろうか。だが、実権なき弱少民族だから、かろうじて歌によってでも胸襟を開かざるをえなかった。

うちの息子は面の書記
月給もらって一五〇両
五〇両を米代にし
二五両も面長にやり
駐在所の巡査部長
酒飲もうとやってきて
郡庁から郡主事が
洋服着て出張に来て
向いの家飲み屋売春宿に
金を使おうと引っぱって行くよ
面書記して三年で
七五〇両も借金したよ
田畑買うのはさておいて
役人もてなすのに家売ったよ
〈口民　二三四五〉

この民謡は直接的には、日本政府の官吏に対する諷刺だ。面と駐在所がいたる所に設置され、民衆が聞くこともできなかった名目の税金と法律上の義務が、自分の知らないうちに賦課されて、目に見えない拘束が生み出された。従って民衆と官吏とは相互に反目し、離れた位置におかれた。為政者は善政よりは官の権威を確立するのに力を注ぎ、そのおかげで官吏たちは強権をほしいままにできたが、反面、民衆は酷政の桎梏から、切実な痛みを経験した。そうして、李朝が残した官尊思想に日帝の官僚主義政策までも結びつき、民衆は、官吏となることにあこがれ、その道のみ

が生の栄華だと信じさせられた。その結果日帝時代には、官吏志望が多かったが、かろうじて面長、郡主事となり俸給は交際費に支出された。彼らは韓国の国土に警察国家を確立しても満足できず、満州大陸を飽くことなく狙っていた。いわゆる国境警備という名目で鴨緑江、豆満江沿辺に監視所を作り、事態の発展に警戒を怠らなかった。

白頭山のふもとに憲兵所を作り
トエノム来るまで待つよ　〈民研〉
（トエノムは中国人の卑称）

併合前から憲兵をおいて軍事面のみならず政治面にまで手を伸ばし干渉した。彼らにこびへつらう機会主義的親日分子たちを補助員として採用した。この補助員の弊害もまた少なくなかった。

民謡が強者に対抗する時は、隠語で表わしたり、またはたとえで歌う場合が多い。次の歌がその代表的な例だ。

조지로　왜목　친다

この短い一節の歌は一九三二年頃に流行したが、「조지로」は、朝鮮・支那・露西亜の初音である朝・支・露をとったもの、あるいは男根を意味し、「왜목」は倭の首を意味するが、日帝に対する抵抗意識から歌われた諷刺性のめだつ歌だ。（친다は殴るの意か？――訳者）

一九三三年は満州事変の年だから、朝・支・露は日本を駆逐はできなかったが、結果的には未来を予言する歌としての機能を充分に果たした。このような民謡が流行したという事実は旧帝にとっては不吉な前兆とならざるをえなかったのである。伊藤博文に関しては次の歌がある。

一、日本野郎の
二、伊藤博文が
三、三千里江山で
四、四柱（運勢）が悪く
五、五台山を越えたが
六、六鉄砲にあたり
七、七十とった年寄りが
八、八字（運勢）が悪くて
九、どたぐつでけとばされ
十、十字架にはりつけだ

数え歌の形式に韓民族の怨讐である伊藤博文を歌った。彼は結局ハルビン駅で安重根義士によって殺された。彼は韓国併合へのあらゆる計略を弄し民族の怨恨の的となり、正常な死をとげられず、民衆の口からのろいをうける歌まであらわれ出た。日本にとっては功績ある偉人も我々には最大の兇賊であると見られたし、日本的な権威を我々は認めなかった。次に筆者が中学の頃、いわゆる「支那事変」の時に、国民学校の児童たちが日本語で歌った次の歌がある。

イロハニ　コンペイトウ
コンペイトウワ　甘イ
甘イワ　オ砂糖
オ砂糖ワ　白イ
白イワ　雲
雲ワ　速イ
速イワ　汽車
汽車ワ　黒イ
黒イワ　煙
煙ワ　カルイ
カルイワ　石油
石油ワ　高イ
高イワ　富士山
富士山ワ　遠イ

遠イワ　東京
東京ワ　偉イ
偉イワ　天皇
天皇ワ　人間
人間ワ　私　（原文も日本語）

このような歌をしりとり歌というが、この形式は即興的にいくらでも加減と挿入が可能だ。こんな形式の歌が現在も児童に膾炙されているのを見ることができる。この歌で重要なのは、初めはたいして意味がないが終わりに行くほど問題があるということだ。すなわち、高いのは富士山であり、富士山は遠い所にあり、東京は日本の首都だから立派であり立派で偉大なのは天皇で、天皇は結局人間であり、人間ならば自分も人間だから同格だという意味だ。日本人が、天皇を神聖不可侵だとして、人間ではなく生きている神だと絶対的な尊厳を付与したのに対し叛旗をかかげ、天皇も人間であり、人間である以上は自分も天皇とどこがちがうか、と叫ぶ否定的な反抗性の表示だった。天皇が神であるという詭弁に我々がうなづけるはずもなく、天皇を格下げして天皇も人間だという現実論を主張したことは、天皇の権威への根本的な嘲笑であった。当時の情勢から見て、大胆な意識的反抗だった。このように、抗日意識が単に何人かの革命家の心の中にのみあったのではなく、全韓民族の誰もにそんな心が芽ばえていた。

日帝が太平洋戦争開始後にとった政策により、韓民族は生きることもできなくさせられた。創氏改名、供出、徴兵、学徒兵、日本語常用など、想像を絶する苦しみが我々の生活を重ねておそった。この時の歌に次のようなものがある。

××ケツの穴
ラッパのケツの穴
ラッパを吹いたが
鼻がつぶれて
病院に行ったのに
治してくれずに
警察に行ったのに
ほっぺたぶたれるだけ
家に帰って考えりゃ
くやしくて死にそうだよ

太平洋戦争も初期には勝利をあげたが、後半期に入ってからは没落の過程をたどった。彼らがあまりにも虚勢をはって自己を正しく評価できず過信したことから敗北した。情勢が不利となるに従い、総力戦にかこつけて心理的な不安を韓民族への弾圧に転嫁した。彼らは類例を求めがたい悪政を断行した。言葉と姓と名を持つ自由を奪い、後患を恐れてインテリ青年を戦場に引きずり出し、父や兄を徴用で工場や炭鉱に追いやって、一年の農作業を終えれば軍糧として農作物を供出させて国民の生活をかえりみない無慈悲な政策をほしいままにした。当時のそうした実情を連想してこの童謡を分析すれば理解も容易である。この歌は子供たち同士で遊びながら互いに名前をよんで歌われた。ラッパをふいたというのは韓国人として日帝の前で異見を提出したという意味と思われる。彼らはすべてをわい曲し、正当な理論さえも韓国人の口から出たものであれば弾圧の対象とした。鼻をつぶされながら正当な発言をしたが、ウェノムに侮辱されたことを言う。その発言の中には、民族の不満のまとである供出、徴用、創氏などが含まれた。鼻を負傷したとすれば、病院に行って治療するのが当たり前だが、病院に行っても治療を拒否された。その理由はもちろん「不逞鮮人」であるからだった。病院の精神が階級や民族的差別なく公正にしなければ

ならない、赤十字の精神にも背反した差別待遇をうけた。ここでまた不満を訴えようと行った所が警察だった。警察は公正に正と邪を区分しなければならないのにかえってほっぺたをたたかれた。これもまた「不逞鮮人」という口実で暴行を加えた。これは完全に法の違反であり、優越感からくるべっ視だった。こうして、負傷→病院→警察署と、何の得もなく逆にむちうたれる。帰って考えるとくやしくてたまらなかった。これが当時の日帝下においての我々の実情だった。この童謡に日帝を追求する文句はひとことともないが、その中に内在する民族的悲哀と抵抗意識がかくされているのをうかがい見ることができる。

世相を反映した民謡

韓国併合の歴史的事件は我々の社会・文化・生活面にたくさんの変質をもたらした。侵入者に対する抵抗がありながらも、時代的大勢にはしかたなく押し流されるようになってしまったのだった。

李朝末の風雲のすきをぬって強大国が魔手を伸ばして入ってきて、それと同時にヨーロッパ的な物質文明の影響はだんだん社会の様相を変え精神的な分野にまで新たな衝撃をもたらした。そして併合を契機として日本を経て新しい思潮が上げ潮のように流れ込んできたことから、我々の生活は大きな変化を起こさざるをえなかった。固有な東洋的思考方式は批判され、封建的倫理観に立脚した生活は止揚されざるをえず、生活の諸般の面が変貌させられた。交通の発達、教育の普及、出版・言論の一般化、そして行政機構および制度の一新は、ともあれ新たなものへの変化を促した。馬の代わりに汽車に乗り、いかめしい冠の代わりに中折帽が登場したし、スマートな洋服と近代化建築が新たに目についた。こうした現象は単なる形態的な変化を意味するだけでなく、実際に内容的な変化までも象徴していた。こうした現象は一つの時代性をあらわす過渡的様相であり、当時の世相をよく反映した歌にアリランやノレカラなどの民謡がある。

青いたそがれ空には星も多い
このわが胸には心配も多い
日本大阪がどれほどよくて
花のような恋人おいてこれようか
ちょうのいぬ丘に
花咲いたとて何とするか
恋人いぬこのわが身
お化粧しても何とするか
雪どけ水で
大同江もとけて
いとしいあなたの言葉に
私のこの胸とろける

これらの歌はすべて、人間の本能たる愛情問題を主題として、儒教の生活方式から解放された自由奔放な人間性が率直にあらわされている。青い空に無数に輝く小さな星に、胸の中の愁いをたとえて歌った。こうした現象も新世代がもたらした一つの時代的な所産であった。そして、ここで等閑視できないのは日本への労働者の出稼問題だ。農業を天下の大本と考えたのも昔のことで、物質文明の輸入は人の関心を都市に集中させた。資本主義はまず都市で開花したために農村大衆を誘惑したのであり、従って貧窮農民が金をかせぎやすい日本の大阪などの工業都市に集中するのは、ごくあたりまえといわざるをえなかった。父母妻子をすてて出稼ぎを目的に、海を渡って遠く日本の大阪へ旅立つ流浪の悲劇的な群像が歌にあらわれないとしたら、かえっ

ておかしなことだ。

天は高くても雁はすいすい
日本は遠くても月づき手紙
子供みたいな兄ちゃん日本大阪行って
明けの明星みたいな姉ちゃんを
面倒みてくれる
いとしい兄ちゃんが服でも作れと
こずかい三銭送ってくれたよ
三銭とりに郵便局行ったが
一、二、三、四わからなくて
お金もおろせんよ
来い、行け、とうろうろさせられ
泣き出して
停車場の広場が漢江みたいに水びたし

この歌は日本の大阪への出稼で日雇仕事をしてかせいだ金の送金をきっかけにして、家庭で発生した事件を諧謔的に歌った。人間の離別の中で最も心がいたむのが生き別れであり、青春のさなかに困窮により生き別れとなることはさらに痛ましいものであることから悲劇的な民謡が生み出された。だが、そうした悲劇も民謡では、笑ってしまうような冗談もまじえた諧謔的な歌としてあらわれた点が注目を要する問題であり、民族性とも関連させて論議すべきだろう。

文明開化からもたらされた顕著な問題は、また倫理の問題であった。男女七歳にして席を同じうせず、三従之法（女は幼時は父母に、結婚しては夫に、老いては子に従えというもの——訳注）、七去之悪（儒教で妻を離縁しうるという七つの条件——訳注）などの儒教的道徳観はすでに栄光を失い、時代思潮におされて新たな世相が展開された。

春を売りに行くよと髪を梳く
東南風吹いて乱れるさ

厳格な倫理観の清算は、近代的病弊である売春の合理化となった。おしろいをつけた妖しい女たちが都市の夜の街を席捲し、ついには村の酒席にまで進出して封建的識者の顔面をひきつらせたが、これは時代の尖端的な事実だった。

つれてはきたがよく見ると
村のパンパンにもならないよ

現実と欲望とはたいがいの場合、相反するものだ。いつでも、自分を高く評価したい気持ちは自然なものだ。既に例をひいておいた邪道のようなことがあるからこそ、さらに虚栄と欲望を充足させうる都市へ進出しようとするのも無理はない。そこでは、満足するに足る黄金と官能の喜悦が可能であったからである。

田んぼのいい所は線路になり
娘のきれいなのは売春に行く

農業生産のみで生を維持する彼らの目に、沃土が鉄道の敷地とされていくのは想像をも絶したことであり、またどう惜しんでもすまないものだった。俗に、死んだ子の齢を数える、逃がした魚は大きい、などの言葉があるように、その土地がやせ地でなければ、線路となったことは心理的作用からさらに未練が生じたのである。近代都市文明は、美人たちをおしろいでぬりかため倫落させる作用を一層促した。ことがこのくらいになって見ると、既に正常がかえって非正常となり非正常が正常となる転換が実現される。

新作路のまん中にハイヤーが走り

ハイヤーの中じゃ若いのがいちゃつく
昼ひなかも夜よなかも片思いだね

新作路で各所が結ばれ交通が四通八達した。みな労働者たちの汗の結晶だったが、実際彼らには別に不思議な恵沢はなかった。限りなくのびている新作路のまん中に時代の寵児である自動車が走り、その中には若い男女が満足した表情で乗っている時、彼らは憤慨もし、また一面うらやましそうな目でのぞみ見たのだろう。こうした部類の中には決してウェノムや旧支配層だけでなく、現実に便乗しようという日帝にこびへつらう分子が大部分であったのだ。ここでまた、支配者、すなわち日帝に対する隠然たる不満が潜在したのはもちろんだ。

洛東江七百里流れきて
ハイカラの田舎紳士がいききする
（朝鮮の十里が日本の一里）

ソウルから釜山までは山を越え川を渡って一週間あまりかけて行かなければならなかったが日帝は京城～仁川と京城～釜山間の鉄道を敷設したことから、これは日帝の搾取の大動脈となった。鉄橋をかけてハイカラの田舎紳士だけが行ったり来たりするのをのぞみ見た農民軍としては、不届きだとも言い、うらやましいとも言っただろう。既に旧勢力は文明の前に陶汰され、現実的な敗北があるのみだった。そのため韓国農民は呻吟せざるをえなかった。このような現実の中から三・一運動のような民族運動が爆発するのは自然なことである。

洋服を着た紳士殿
靴下のかかとがパンクした

この歌は日帝に対するいんぎんな諷刺だ。そして新時代を彼らが大切と思わなかった証拠ではないか。

八・一五解放以降の民謡

第二次世界大戦は日本の敗北で終結し、四〇年近く韓半島を踏みにじった日帝は、ついに追い出された。この歴史的事実は、わが民族に希望と勇気と夢を実現しうる機会をもたらした。三千万韓国人は歓喜にあふれ、心から万歳を叫んだが、我々の現実はそれほど平坦な道ではなかった。国土の南北分割で無数の悲劇が生まれ、見たことのない戦勝国の軍隊が進駐して社会はいろいろと変化を見せた。日帝の拘束から解き放たれた感激と喜悦があった。また、今こそやり甲斐をもって堂々と生きられる世の中の夢を描けた。だが、実相はあまりにも期待はずれだった。従ってこのような社会相が民謡の中に投影されずにはいられなかった。

まず、解放の副産物として社会に登場したのは「パンパン」だ。外国軍の進駐は、彼らの生理的欲情を充足させる群像を出現させた。おしろいの女人が異国風の姿にしつらえ街を闊歩して、べっ視と嘲笑が彼らの身にしみて浴びせられた。時代の産物とはいえ、この国の社会的条件や倫理観の尺度から見る時には、非難の対象とならざるをえない。

パンパン　くそパンパン
はすに靴はいてどこに行くの

彼らの生態においては日ぐれから活動が開始されることから、子供の目から見るとしてさえも決して正常なものたりえず、怪しげな存在として認識され不潔なものにたとえて、

彼らをいやしいものとして扱った。こうした現実は単純に駐屯軍と彼らとの個人的関係にとどまらず、実に社会問題として登場し、我々の倫理観に衝撃を与えた。その影響は次の歌から知ることができる。

毛をそって風呂につけたひよこをやって
めんどりがおんどりに懸想したよ

解放は自由と平等をみやげとしてもたらした。すべての人は政治的・文化的・社会的に自由を得て、男女は平等となった。こうした現象は民主主義思想の実践として歓迎してむかえたが、一部ではこれを曲解ないしは悪用して利己的合理化の方途とする奇怪な現象も発生した。この民謡はめんどりがひよこを送り出しておんどりに恋情を訴えるというものだから、既に従来の位置が転倒したことを意味する。すなわち、東洋、特に儒教社会においては絶対的な男尊女卑の従属的関係だったのが、韓国では八・一五を契機としてそうした倫理観は清算され、平等をはるかにこえてかえって女性が能動的に君臨しようとする現象を指摘したのだ。そして、子供の奴隷とならなければならないという旧来の観念も既に権威を喪失し、利己的な思想が旺盛で子供よりは自分の喜悦が生活の主眼とされた。これももちろん八・一五以降輸入された新思潮であることはまちがいない。

八・一五は政治的には日帝から解放され独立国家として出発することであったが、いまだに執政の経験の少ない我々としては、すべての国民に満足を与えられぬこともあったのは事実だ。ことに八・一五当時の歓喜で、新生政府に対する期待が大きかったから、批判の目が鋭かったのも事実だ。

あすあさっては配給所
あちらこちらと面事務所
またあらわれた税務署
めちゃくちゃするよ警察署

この歌は民衆の不満が表示されている。事務的な拙劣さと無能が表面化するに従い、官の威信はおちた。行政は公正でなければならないのに、意識的なもの、また意識せぬ失敗の現実への冷静な批判がされたのだった。解放直後の混乱した社会相がそのままあらわれた。

解放後の政治情勢は満足するに足るものではなかった。独立したという我々韓国は、社会的・政治的な分裂の様相を露呈したが、かえって敗戦したという日本、ドイツは日に日に秩序が回復されていった。特に我々の現実が、米ソ両大陣営の中間に位置して、外交的・軍事的に両国が対峙しており、国内は左右に対立していたが、楽観を許さない。こうした状態から次のような歌があらわれた。

日本人は起き上がる
米国人は信じるな
ソ連にだまされず
朝鮮人は注意せよ

客観的情勢にてらして国民に警告した歌だ。米軍政当時の実情から見て、民族主義的な思いからこんな民謡が発生した。

わが民族の有史以来、初めて体験した選挙の実施において、当落を予言し諷刺する民謡がいたる所で歌われた。

誰それはさんざん金使う
誰それはまた出て行った
誰それは当選するかせぬか
誰それは口が達者

この言葉自体は完全な民謡ではない。共感から生まれ出た言葉として、民謡に発展しうる要素をもった。時代の変化に従い民謡も新局面を開拓することを怠ってはならない。

韓国民謡は現段階から見て採集事実はほとんどおえたところであるが、その分類型は約二百余となる。この数字は決して外国の民謡に比べて少なくないし、文献化されたものと筆者の採集分を合わせて一五〇〇〇余を数えうるが、その中には重複と訛伝などももちろん多い。

八・一五の民族解放を契機に民族文化の保全ないし昂揚策として民謡の採集研究に関心が高まり、学問としての民謡論が大学の講座に進出するに至ったことは、よろこばしい現象だ。民謡が機械文明のかげに圧迫され衰退の一路をたどっていることは、単に韓国の民謡のみが当面する問題ではなく、全世界に共通し現実に基いている。従って、今後の課題は資料採集と並行して研究に重点をおかねばならないのだ。

梶村秀樹他編『韓国の思想と行動』(太平出版社)中の大村益夫氏の訳を参考にした。

編集後記

夕刊の第一面で、中国政府が日本政府による歴史教科書のかきかえにはげしく抗議している。韓国政府との闘取引きのほうは、どうやらメドがつきかけたらしい。

新聞をひっくりかえす。最終面の下半分ほどを『大日本帝国』という映画の大広告が埋め、江藤淳が「日本人はようやく〝自分の物語〟を自信をもって語りはじめた。それがこの映画だ」という意味のスイセンのことばをよせている。かれはよろこんでいる。戦後の日本人が忘れていた「自分の物語」がいたるところでよみがえりつつある。教科書においても娯楽映画においても。

この号では、第一回の水牛社会科コンサートの主題にあわせて、日本人の頭のなかから消されようとしている「他人の物語」をあつめた。もちろん「他人の歌」もだ。「他人の物語」の力を借りることなしには、「自分の物語」を語ることすらできない。そういう「他人の物語」があり、そういう「自分の物語」がある。

なぜ学者たちは教科書からいっせいに手をひかなかったのだろう？　ふしぎだ。

購読の御案内

＊本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

＊申し込みと送金は郵便振替（口座名水牛編集委員会、口座番号東京四―九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

＊購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信　第四巻第八号
一九八二年八月十日
定価　二〇〇円
発行人　堀田正彦
発行所　水牛編集委員会
〒154東京都世田谷区新町2―15―3
八巻方
電話〇三（四二五）九六五八
振替口座東京四―九一七九二
印刷所　㈱トライプリントショップ